「信州 知の連携フォーラム（第 1 回）」報告
～信州の地域資源と学びの支援：戦略的 MLA 連携による地域創生～

2016（平成 28）年 12 月 13 日（火）、信州大学附属図書館中央図書館セミナー室を会場に、「信州 知の連携フォーラム（第 1 回）」が開催された。当フォーラムは、信州大学附属図書館と県立長野図書館の主催、長野県信濃美術館・東山魁夷館と長野県立歴史館の共催、そして長野県の後援によるもので、長野県における知と学びに関わる MLA（Museum，Library，Archives など、文化的情報資源を収集・蓄積・提供する公共機関）が連携し、信州における価値ある地域資源の共有化と知識化・発信を通して、地域住民の学びを豊かにし、地域再生につなげていく方策を議論することを目的として実施されたものである。

本稿では、当フォーラムの内容を報告し、今後のさらなる議論の展開と方策の実施のための資料提供を行う。取りまとめに当たっては、各パネラーの発表・発言の意図を汲み、その場の雰囲気を可能な限り再現することに努めたが、文章での読みやすさを配慮して、要約、言い換え、省略、補足等を行っていることをあらかじめお断わりしておく。

当日は、渡辺匡一信州大学附属図書館長による基調講演が行われた後、渡辺館長の進行により、橋本光明長野県信濃美術館長、笹本正治長野県立歴史館長（前信州大学附属図書館長）、平賀研也県立長野図書館長（前伊那市立図書館長）の三者によるトークセッションが行われた。

以下にその内容を報告する。

【第 1 部】基調講演

「信州における MLA 連携で聞いてみたいこと、考えてみたいこと」

（信州大学附属図書館長　渡辺匡一）

最初に MLA 連携とは何なのか、その始まりから現在に至るまでの流れを共有したい。

「MLA 連携」とは、ミュージアム（Museum）、図書館（Library）、文書館（Archives）の連携のことである。それぞれの頭文字をとって MLA と呼ばれている。いずれも文化的情報資源を収集・蓄積・提供する公共機関であるという共通点を持ち、情報資源のアーカイブ化等の課題を共有していることから、近年、連携の重要性が認識されてきている。

MLA 連携の重要性が認識されてきた背景を確認すると、アート・ドキュメンテーション協会が 1989 年に設立された趣旨に「美術館／博物館、図書館、アーカイブ、芸術関連機関の新しい連

携をめざし…」とある。日本ではこれがもっとも早い動きである。この動きが活発化してきたのは 10 年くらい前からであるが、2010 年前後に関連する書籍が相次いで出版され、それまでの経過と今後の課題がまとめられている。

MLA 連携の機運を推し進めたのは、デジタル技術とコンピュータ・ネットワーク環境の進展である。デジタル化すれば、MLA の各資料を総合的に扱うことができ、ネットワークを介していつでも・どこでも見ることのできる環境が提供できることから、MLA 連携への期待が急速に高まった。

近年、ネットワークから多くの有用なデータベースが利用できるようになり、利便性が急速に高まってきている。しかし、技術的な環境は整備されてきたものの、MLA 連携は進んでいるとはいえない状況にある。

田窪直規は『MLA 連携の現状・課題・将来』（勉誠出版、2010）で、MLA 連携が容易に進まない理由として、次の 3 点を挙げている。

1) A(文書館)の知名度が低く、館数も少ない。
2) 日本では M（博物館・美術館）、L（図書館）、A（文書館）それぞれの行政区分が分かれている。
3) コンテンツのデジタル化を促進させる政策が弱い。

この中の 3 点目については、私は技術面の政策だけではなく、利用者の視点、利用者の開拓も含めての文化政策の欠如に問題があると考えている。散発的な事業はあるけれども、事業を継続するためのポリシーがないため、予算が切れると終わってしまう。たとえば「信州デジくら」は、長野県の誇るべき、MLA 連携の先駆けのような企画であったが、2010 年以降、更新されなくなってしまった。

また、大学図書館では、MLA の資料をすべて持っている。例えば信州大学附属図書館では、絵画コレクション（旧制松本高等学校が所蔵していた絵画）や小谷コレクション（和古書・古地図等を含む山岳関係資料コレクション）、多胡文書（松本藩藩校の教授を世襲していた多胡家に伝わった和図書・近世古文書）を所蔵している。しかし、図書館ではこれらの資料の扱いを自らの役割の中に位置づけてこなかったために、データベース化は十分でなく、活用も進んでいるとはいえない。

現在、知識の流通や受容の仕方に大きな変化が生じている。国立大学図書館協会では今年（2016 年）、「国立大学図書館機能の強化と革新に向けて～国立大学図書館協会ビジョン 2020」を策定した。これは、ネットワークの発達により新しいコミュニケーションの様式が普及し、知のあり方が大きく変わりつつある中での、国立大学図書館機能の強化と革新に向けてのビジョンを定めたものである。

このビジョンでは「知の共有」「知の創出」「新しい人材」の 3 つの柱を立てている。「知の共有」とは「〈蔵書〉を超えた知識や情報の共有」であり、蔵書だけではなく、デジタルコンテンツ

も含めた「知の整備」を目指す。「知の創出」とは「新たな知を紡ぐ〈場〉の提供」であり、図書館の中だけではなく、ネットワーク上に新たな知を創出するための場を設けることを目指す。「新しい人材」では、このような新たな〈蔵書〉や〈場〉を生かし、多様な知の創出を担う人材の育成・確保を目指す。信州大学においても、このビジョンをベースにして、信州の地にある大学図書館としてのビジョンを創っていきたいと考えている。ビジョンに即して、大学の蔵書（コンテンツ）の整備を行うとともに、大学の枠を超えて、信州における MLA 連携に向けて関わっていきたい。

本日来ていただいている 3 名の方にお聞きしたいことがある。まず 1 点目は、「信州デジくら」のような興味深い取組みが行われているにも関わらず、継続していかない現状がある。継続できる仕組みづくりには信州ならではのポリシーが必要であると思う。「行政」の問題であるかと思うが、お考えを聞かせていただきたい。

次に、個人的に関心のあることでもあるが、信濃美術館や松本市博物館など、これから新しい建物ができる施設がある。これらの施設は、どのように「新しい」施設となるのか、MLA との関係から聞かせていただきたい。

3 点目に、情報発信の「早さ」と「量」の問題をどう考えるか。インターネットで検索を行うと膨大な情報がヒットするが、その中で MLA 連携により発信する情報は優位性を保てるのか。MLA 連携によりまとめていく情報の束が、多数の中のひとつにならないようにするためには、何らかの魅力を持つ必要があると思うが、どのような工夫が必要か。

以上、MLA 連携の現状を確認することを中心に、3 名の方への前振りとしての話をさせていただいた。

【第 2 部】トークセッション

1. 問題提起

1）長野県信濃美術館・東山魁夷館長　橋本光明

信濃美術館は善行寺の隣にあるが、今年で 50 周年を迎えたとても古い美術館である。林昌二さんが設計された建築物であり、長野県が天に向かって発展していくことを象徴したデザインとなっている。

林昌二さんは 5 年くらい前に亡くなったが、竹橋のパレスサイトビルや新宿の NS ビルを設計したとても有名な方である。パレスサイトビルができたときには NHK のトップニュースで報道されたほどで、モダン建築を代表する方だった。

併設されている東山魁夷館は、26 年前に建てられた。東山魁夷さんは世界的にも有名な日本画家である。信州出身ではないが、学生時代から縁がある信州に作品を寄贈いただけることとなり、長野県は急いで建物をつくった。その設計者は谷口吉生さんで、ニューヨーク近代美術館を

設計した世界的にも有名な方である。谷口さんが設計した美しい建築物を見るために当館を訪れる方も多い。

このような歴史のある二つの美術館において、内容的にも優れた企画を行ってきたという自負がある。

ところで、私は 2011 年から館長を務めているが、その当時、西洋美術館を中心にアーカイブの計画が動き始めたという情報を知った。遡ると、2003 年頃からいろいろな動きが始まっている。「信州デジくら」も同時期である。

「信州デジくら」が継続していかないという話が出たが、その原因として、文化庁の後押しで始まったプロジェクトであるという経緯がある。継続性がないのは、受け身の姿勢であり、熱意がないからである。ヨーロッパやアメリカでのアーカイブの歴史は古く、実績もあるが、日本はどうしても後追いになる。後追いであり、外からの圧力なので、目的やポリシーを持たずに受け入れてしまうが、進めていこうとする内側からの熱意がないので継続しない。

二ヶ月前の信濃美術館の 50 周年記念行事で、子どもたちに美術館に対する夢を絵に描いてもらった。入選したのが資料の絵であるが、ありがたいことに信濃美術館を描いてくれている。ロープウェイで行ける美術館とか、スケートボードで滑っていける美術館とか、子どもらしい絵だが、こういった子どもの夢はとても大事である。アーカイブの話をする前提として、美術館とは何かを考えたときに、やはり大切なのは作品を見ている時間であると思う。美術館に来てもらって、目の前にある絵を見ているその瞬間がもっとも大事である。だから、子どもたちのこういったイメージを大事にしたい。

また、信濃教育会では子どもの作品を収集しており、15 年ほど前だが、昔の子どもの絵の展示をしたことがある。私はそのとき信州大学の教員だったので、学生を連れて展示を見にいった。そのとき、ある学生が、自分が小学生のときに描いた絵が展示されているのを発見して、非常に喜んでいた。私はこれが大事なことだと思った。作品は埋もれていてはならない。一定の年月が経ったら公表し、展示をしなければいけないと思った。

アーカイブの精神も同様である。作品は活用されなければならない。作品は貯めこんでおくだけでは駄目で、時期が来たら展示をし、社会への影響を見ていく必要がある。

ピカソは 1973 年に亡くなったが、10 万点くらいの絵を描いており、遺産相続がたいへんだった。ピカソの息子さんのひとりが、ピカソの作品のうち、1 万点を相続できることになったが、そのとき「作品というのは、主人（作者）の手から離れたら、もう、皆さんのものです。」という言葉を発した。ピカソの膨大な作品も、最終的には、人々の共有物になっていく。これがアーカイブの精神だと思う。

2) 長野県立歴史館長　笹本正治

長野県立歴史館の役割は、長野県における埋蔵文化財や歴史的価値ある文書等の歴史資料の収集・整理・保存を通じて、歴史遺産を子孫に継承し、未来を映す歴史知識の泉となり、県民が交流し、楽しむ場を提供し、歴史情報センターとしての機能を果たすことである。

資料の収集・整理を基本とし、その上で調査・研究を行い、情報提供を行い、講演会を行い、展示をする、という順序で業務を行っている。

最も重要なのが資料の収集・保存であるが、資料保存のためのバックヤードは一般に知られていない。歴史館にはバックヤードとして古文書書庫、行政文書書庫、フィルム保管庫があるが、フィルムだけでも約 96 万コマを保存している。この膨大なフィルムは急速に酸化が進んでいるが、対策は立っていない。

行政文書書庫には地図類だけで約 1 万 8 千点ある。おそらく明治初期のものとしては、日本で最多の地図を持っているが、これらの資料も酸化が進んでいる。また、公文書が 5 万 7 千点あまりあるが、県から毎年のように収められ、増えていく。さらには、信濃史料編纂資料が未整理のまま積まれている。

古文書書庫には古文書が 20 万件あるが、書架に収めるためには燻蒸の必要がある。特別収蔵庫には、通常の書庫には置けないような最重要の資料があり、重要文化財を含む特別なものが保管されている。また、考古整理室があり、県内の調査資料だけでも 5 千点を所蔵している。

来訪者が驚くのは保存処理室である。歴史館は古いものを収集しているだけというイメージがあるが、保存処理や保存修復など、科学的なことも行っている。歴史館はこの点でも日本有数の技術を持っている。

考古遺物は約 3 万箱あり、木器が数多くある。木器は水中から出すと乾燥してしまうので、いかに保存するかが重要な作業となる。木器の点数は 4 万 8 千点に及ぶが、未処理のものが 1 万 7 千点もある。

これらのさまざまな資料をわずか数名で管理しているのが現状である。

一般の人たちは入場券売り場から入場するが、無料で利用できる図書室もあり、県内の調査報告書等はほぼ全て揃っている。現在、県立歴史館の年間入場者数は 10 万人程度だが、ほとんどは小学生である。長野県内の小学生の約 5 割は歴史館を訪ねるが、小学生が一番関心を持っているのは、入口にあるナウマン象である。

歴史館の館員は、このような来訪者に対して丁寧な説明を行う。また、常設展示だけではなくてバックヤードを見学することを勧め、考古整理室なども使って学んでもらっている。

松本から長野方面に抜けていくときに通る明科トンネルで、縄文時代人の骨が 300 体発掘された。その全てを歴史館で収蔵しているが、小学生にも縄文時代人の骨の実物を見てもらう。小学生はギョッとするが、このようなときにも館員は実に見事な説明を行っている。

歴史館は県民に支えられている。そこで、曲玉づくり体験など、県民に対してさまざまなサービスを提供している。中学校の職場体験、大学生の博物館実習にも利用してもらっている。ボランティアガイドさんにも協力いただいている。

現在、博物館協議会という組織が立ち上がっており、長野県の博物館の横の連携を進めている。例えば、白馬村、栄村で地震があったが、被災地の文化財保全が問題となっている。博物館協議会の人たちも、具体的なモノを題材にして、この問題に関しての研修を行うとともに、研究者を招いての研究報告会も行っている。

歴史館は地理的に不便な場所にあるが、県民への発信、県民との交流が歴史館の現在の重要な使命であるため、講座を頻繁に行っている。館長は県民へのサービスとしての講演や講座のために、休む間もなく様々な場所へ出かけていく。

しかしながら、歴史館の基本的な役割は、県民に関係する歴史資料の収集・保存だと思っている。資料は痛んでいくので、その劣化を遅らせることが私たちの使命である。そのうえで研究をし、よりよい展示を行って、教育に結びつけていく。

最後に、信州におけるデジタルアーカイブ事業が進まない理由だが、進めたくても人がいない、進めたくても予算がない、ということに尽きる。

3) 県立長野図書館長　平賀研也

図書館は今、大きな転換期にある。情報のデジタル化の進展が理由のひとつであるが、図書館サービスの観点から見ても、例えば、大学図書館には学生同士が会話しながらグループで学んでいる姿がある。かつてはあまり見ることがなかった風景である。公共図書館でも、市民が今までと違った姿で図書館で学ぶ様子があってもいいのではないかと考える時期に来ている。

MLA 連携の考え方がこの 10 年弱の間に出て来た。とはいえ、企画展を一緒にやったり、資料の相互貸借をやったりすることを考えても、あまり意味がないと思う。新しい技術を使ったサービス基盤の構築が中心になるべきであると考える。

しかし、MLA にはそれぞれの特性があり、扱っているメディアの唯一性、不可分性、代替可能性の観点で分類できる。例えば、キャンバスに描かれた油絵は、メディアとコンテンツを切り離すことができないので、不可分性が高い。本は同じものがたくさんあるので代替可能性が高いが、ピカソの絵はその 1 点しかない。扱う資料の唯一性、不可分性が高く、代替可能性が低いのが博物館であり、不可分性が低く、代替可能性が高い資料を扱うのが図書館である。このような特性があるので、MLA 連携で共通のデジタル情報基盤を構築しようとする際に、考えなくてはならないことはある。

デジタル化で重要なことは、メディア自体をデジタル化（画像化）して共有可能とすることと、メタデータを整備することである。図書館はデジタル化を先導していかなければならない。なぜ

なら図書館は、多くの人が情報の入口であると認識しており、アクティブな利用者が主体的に何かを調べようとして訪れる場所である。何かを鑑賞しよう、いい時間を過ごそう、といった漠然とした目的ではなく、知的な欲求を持った利用者が来る。またその欲求に応えていくレファレンスサービスがある。

デジタル情報化に関しても図書館は一日の長がある。1980 年代の半ばから、書誌情報が全てデジタル化され、同一の基盤で図書を検索できるようになった。それに比較して博物館では、電子カタログ化されているものがまだ十数％であり、公開されている率はもっと低いと聞く。従って、MLA がデジタル時代の共通基盤を創ろうとするとき、リーダーシップを発揮すべきは図書館である。

プラットフォームについては、活用の視点が重要である。図書館も博物館も、何かを集積し、カタログを作成し、検索可能にすることを行ってきたが、活用できる状態にして公開することが必要である。この視点は震災アーカイブ以来、強く意識されるようになってきた。

従来は、検索できる状態にさえしておけば、研究者等により活用されて、それでよしとされていた。しかし、最近の一般の人々の情報の扱い方の様子を見ると、情報の活用法や活用目的についてのイメージが持てていない。その中で、ただ情報量だけが増えていく状況となっている。

実は昨日まで仙台にいて、仙台の荒浜で震災アーカイブ活動をしている方たちのプロジェクトに参加させてもらっていた。荒浜は津波で全てが流されてしまった土地である。そこに昨日一日だけ、昔走っていたバスを走らせようというイベントがあり、参加してきた。

そこで行われているのは、本を読むことでも、美術品を見ることでも、博物を読み解くことでも、古文書の扱いでもない。荒浜に住んでいた人たちが月に一度集まり、わずかに残った写真とか、映像を見ながら、思い出を語り合っている。その語りをまた記録していく。アーカイブや図書館の本を活用するときに、アカデミックに理解するだけではない視野が、デジタル化されたときに出てくるとよいと思う。

また、街歩きを案内するキュレーター（学芸員・司書）がいてもよいのではないか。キュレーターが博物館や図書館の中だけにいるのではなく、街に出て市民と一緒に知る、市民と一緒に創っていく新しいプロセスが、MLA 情報基盤の中で可能なのではないか。今までとは全く違う、新しい「知る」プロセス、「知り方」があると思う。そこから単に情報として「知る」のではなくて、「わかる」、つまり実感のこもった「知」が生まれるのではないか。

また、市民が知的な事実・情報を選び、何かを表現するようなことも支援できるのではないか。そこから住民自治の場としての MLA の話もできるのではないか。振り返ってみれば、そのような姿は、信州が近代以降つづけてきた「学び」だったのではないか。

最後に、博物館、美術館、文書館と一緒に行いたい仕組みの話をしたい。県立図書館には独自の地域資料があり、県内図書館の蔵書横断検索システムもある。また、更新がストップしている「信州デジくら」があり、信州大学附属図書館には山岳アーカイブがある。これらをもっと活用

に向けて発展させていきたい。

信濃美術館に新しくできるアートライブラリーや県立大学、博物館のライブラリーをつないで、本に関する情報を見られるようにしたい。また、「信州デジくら」が再生し、どの町でもそれを活用してアーカイブを作成し、公開・活用できる基盤になっていくといい。

また、デジタル資料の共有地のようなものをつくっていきたい。たとえば、高校で信州学の授業をしたり、小中学校で地域学習をするときに、先生方が個々に一生懸命に指導案をつくっているが、共有されていない。様々なファイル、コンテンツ、道具、マテリアル、事例が共有できるようになったら、より効率的に、深く、何かをできないだろうか。そういうものがデジタルコモンズを通じて、他の地域や国レベルの情報とも一緒に見ることができるようになるといいと思う。

これらの取組みについて、これからぜひ皆さんとお話しながら、構築していきたいと思っている。

2. トークセッション

（渡辺館長）

ここからは、トークセッションということで、話し足りなかったことの補足も含めて、お互いのやりとりの中で話を展開させていきたい。

まず、これから新しい建物ができる信濃美術館について、お聞きしたい。MLA 連携との関係で今までにはない美術館の構想がおありなのか、お話をうかがいたい。また、新しい松本市立博物館の構想についてもうかがいたい。

（橋本館長）

新美術館の話をする前に、図書館からの今日の話をうかがって、今の時代、ソーシャルキャピタルの時代であることを感じた。このような時代を迎えて、とてもよかったと思う。東日本大震災のときに一番早く動いたのは図書館だった。その次が美術館だった。アーカイブでも図書館の方が数段進んでいる。ほとんどの美術館はそこまで進んでいない。

その中で、新しい信濃美術館が 5 年後に完成予定で進んでいる。整備のコンセプトが 4 つある。そのひとつに、「美術による学びの支援」が掲げられており、関連してアートライブラリーの構想がある。

ライブラリー構想を新美術館の目玉にしたいと思っているが、予算や敷地の面で厳しい。小さな図書館になってしまう。県に働きかけていき、アートライブラリーの拠点としてスタートしてほしいと思っている。

（笹本館長）

私は松本市立博物館について語る立場ではないが、博物館の新しい建物については、すでに場所が決まっている。新しい機能のために新しい人材を確保する手順を踏んでいないので、デジタル化の問題を進めることは困難だと私は思っている。同じようなことが他の場所でも生じていて、限られた人がその能力の範囲内でやっていくしかない。

デジタル化が大事であることは、誰もが認めている。では、なぜできないかというと、予算の問題があり、人の問題がある。もっと重要なのは、歴史館の場合でいうと、現代史に直結する資料があり、オープンにできないものが多くある。公開の可否を誰が判断したらよいのかという問題がある。

だから、新しい思想で一から新しい博物館をつくる場合と、すでにある博物館を動かしながら建物を新しくしていくのとでは、大きな差がある。

（渡辺館長）

平賀館長から、博物館や美術館と違って、図書館には利用者が自ら目的をもってやって来るという話があった。私は研究者であり、一般利用者とはいえないが、美術館や博物館に行くと勉強ができないことに不便を感じる。展示物を見せてもらうだけではなくて、そこにあるもので何か勉強したい、調べたい、というときに、図書室があってもよいのではないかと思う。

新しい信濃美術館には図書室があり、絵画を見るだけではなくて、展示の背景にある本などと併せて学べるようになると聞いた。図書館と比べると、博物館や美術館は、自らが主体となって公開する。図書館は利用者のニーズに応じる側なので、来た人が主体となって学ぶ施設であるという違いがある。しかし、MLA 連携においてネットワークやデジタル化によって共有するときに、提供側が選んで公開するのではなくて、使う側に立って公開することを考えるべきではないか。

（平賀館長）

美術館や博物館は、選択し、捨てていく機能である。図書館は、何でも集めていくメンタリティーを持った機能だと思う。もちろん、予算の制約もあるので、実際にはそんなことはないのだが、選んだものは全て集めるという視点はあった。同時に、公共図書館の場合は、お客さんが求めるものが全て、市民が求めるものが全てという考えでやって来た。しかし、もう一度、何を集めて、何を見せているのか、それがどう活用されるのかを、図書館としても考えてもよいと思う。

（笹本館長）

歴史館にも大きな図書館があり、調べものに来ている人は多い。また、古文書から地図から、全てお見せするようにしている。だから、渡辺館長がいったことは、当たり前の話である。しかし、一方で少し不満を感じる。今、信州大学附属図書館に来ている人たちは、勉強しに来ている

のであって、本がなくても空間だけでもいいという人がたくさんいる。歴史館にも高校生が勉強しに来ており、来る目的は多様である。

歴史館の一番の違いが、貸出ができないことである。研究調査を進めながら見せているので、お貸しすることができない。しかし、図書館だけが勉強できる公共的な場所で、歴史館はそうではないと考えるのは違うと思う。

（渡辺館長）

たとえば、新しい信濃美術館に絵画があり、その絵画を説明するための本がまわりを取り囲んでいるような姿を想像するとワクワクするが、そんな建物をたくさん建てていくことは現実的ではない。しかし、モノや資料と、それを理解するために必要な本、本そのものでなくてもデジタルな目録情報だけでもつながっているといいと思う。これは研究者の発想で、一般の利用者がそう思うのかはわからない。ただ、絵は絵だけで独立しているわけではなくて、いろいろな研究や説明、鑑賞などと一緒にあって、理解することができる。著作権などの問題もあるので、所在情報だけでもわかるようなかたちで、信濃美術館の図書室みたいなものを MLA 連携でできないか、などと想像するが、いかがだろうか。

（橋本館長）

絵があって本があるという情景はとてもよいが、例えば、信州大学附属図書館のような自由な空気の中で作品をお見せするのは無理なこと。絵を管理するのはとても大変なことである。展示が美術館の第一目標ではない。優れた作品、残したい作品をきちんと保管することが一番の目的である。図書館は別室につくる。また、図書館といっても美術の専門書が中心であり、何でも見られるわけではない。

私が嬉しいのは、近隣の上越教育大学の院生が東山魁夷研究のために朝から美術館に来ていること。一日中、時には泊りがけで研究している。そんな学生は全国にたくさんいると思う。だから、東山魁夷館に関係した書物を充実させ、東山研究をする専門家に常駐してほしい。これが私の願いである。

（平賀館長）

渡辺館長が、研究者の発想かもしれない、といわれたが、たとえば、「文化財オンライン」の中に一遍上人伝絵巻がある。美術書でも見られるが、デジタル化すると、一般の人が通常は見ることのできない大きさで絵巻物を見ることができる。画像を見て、部分を拡大したりして、遊ぶことを通して、知る入口になったりする。今までにないこんな面白がり方ができるようになったのは、大きなチャンスだと思う。

東山魁夷でも、あの絵に描いている湖はどこだろう、本当はどんな風景なのだろうと、みんな知りたいと思う。あの絵のタッチ、どうやって描いているのかとか。美術品の隣に本がある必要はない。自分がいる場所に、絵も本もあるという状況をつくって、1 点だけの代替可能性が低いものを見たときに感じることを大事にしたい。その入口としてデジタル基盤を活用できると思う。

（笹本館長）

信州大学に石井鶴三のコレクションがある。美術作品は松本市立美術館に寄贈され、それ以外のものが信州大学に寄贈された。本当の美術を知ろうとするなら、その作者の思想や歴史、活動が大事なはずである。それらを知ることのできる資料が時空を超えて集まる体制をつくることは、極めて大事だと思う。

ただ一方で技術の問題がある。「信州デジくら」で一番活用されていたのは歴史館の資料だと思うが、データが重いために、パソコンが止まってしまったりする。技術革新と学問の方法がセットにならないと進めない。理想論と現実論のギャップを埋めていくことが、今後大事になってくる。

デジタル化の向こう側が大事だと思っている。データを集めた先に、私たちはどのような未来をつくろうとしているのか。その未来を語れないままに、情報だけアップするのは、目的ではなく、過程に過ぎない。今、一秒間に膨大な量のデータがアップされている時代であるが、私たちはそのほとんどを見ることができない。現代社会はゴミばかりを増やしているのかもしれない。歴史館には写真データが大量にあるが、今のままでは酸化して終わっていくかもしれない。大事なものをいかに選んで、きちんとしたかたちで伝えて、その先にどんな社会をつくっていきたいのか。大学ではまだ、デジタル化の先で何をやるのかという教育はされていないのではないかと思う。デジタル化の先につくる社会についての目標がはっきりすると、皆が動きやすい。

橋本館長が「信州デジくら」が続かない理由として、文科省の動きに連動しただけだから、といわれた。つまり、目標を定められないままにやってきた。デジタル化はほんの一歩に過ぎない。県民としては、どういう方向が望ましいのか、ということ。現在進められている「信州学」についても、県外の人に信州を説明できる程度のレベルでは学にはならない。次の社会をつくるために、どのように今までの手法とは違うデジタル化を行うのか、それを見せてもらえれば、動きやすくなる。

（平賀館長）

おっしゃるとおりだと思う。とはいいながら、皆が同じ大義名分を掲げるのは気持ちが悪いということも一方にあるので、県のレベル、あるいは地理的な範囲の信州・信濃ということでいえば、そこの多様な人たちが、それぞれの地域の目的をもって使える基盤を用意できないだろうか。ローカルなコミュニティでもないし、国でもないし、その中間に、政策だったり、基盤・プラッ

トフォームの話ができないだろうか。

（橋本館長）
私も美術館に着任したときには、外から見た美術館と、内側から見た現状とのギャップに失望した。文書を出して、県のやり方にかなり強くものをいった。しかし、文句をいうばかりではなく、県と連携を取っていかないと何も進まないことがわかってきた。
実は、山沢前学長のときに美術館と信州大学が連携協定を結んだ。私は、大学内・学部内にいろいろな美術作品があることを知り、実際に見てきて、連携が必要だと考えた。管理が全くされていない絵をデータベース化して整理していかなければいけないと思った。美術館も学芸員の人数が少なくて、その後進んでいないが、大学との連携の大きな目的としてアーカイブの精神があることを伝えたい。これは必ずやっていかなければならない。

（渡辺館長）
先ほど、現代に直結する資料で、個人情報の関係でオープンにできないものがあるという話が出た。オープンにするに当たって吟味が必要であることはそのとおりだと思う。その一方で、いくら整理しても、情報というのは断片的なものだと思う。断片的なものが集まって目に触れる。すると結局、使う側の問題になる。自信を持って胸を張って発信することができるのだろうか。ネット上に次々に情報を出していく中で、発信側の責任というよりも、もはや選ぶ方の問題として考えるほかにない。出す情報は誰にとっても、いくら集めても断片的であり、完全に整理されて、コントロールされた情報というものはつくれない。ある程度無責任に出さざるをえない性格のものである。一方で、使う側のリテラシーは確立していく必要があり、それ以外に方法はないのではないか。

（笹本館長）
私が関わっているものに、古代・中世の地震史料がある。地震に関係する史料は大量にあり、東京大学地震研究所でも史料集を出しているが、理系の人の使い方と文系の人の使い方は違う。それらの史料について、価値判定を行っている。その時代の当事者が記した史料の価値が一番高く、そこから距離を置くとだんだん価値が落ちてくる。この価値のランク付け作業をやり続けているが、たとえば、歴史館がそれを行った場合には、歴史館の名前をきちんと出して、責任の所在だけははっきりさせないといけない。
インターネットで検索すると、情報が大量に出てくるが、最初の方に出て来たものだけしか使わず、使うものについても十分に検証しては使えていない。そんな状況であればあるほど、発信者の信頼性を担保すべきではないかと思っている。私たちが出すものがゴミにならないためにどうするべきなのか。たとえば、信州大学附属図書館という名前で情報が出たとたんに、信州大学

という権威で、これは使ってもよいものだという判定が普通はなされる。しかし、多くのものにはそれが全くない。

ただもう一方で、人の問題だと私は思う。人のつながりがあると、他機関との連携に関してもハードルが低くなる。長野県博物館協議会の強みはそこにある。人と人との交流、信頼関係がなければ、協働など成立しない。

（平賀館長）

最近、医療情報などの分野で、ネット上のキュレーションメディア問題というのが出た。本とか雑誌とか新聞というメディアにコンテンツが載っているという枠が壊れ、デジタルになった結果、権威が崩れてしまった。私は権威は嫌いだが、何らかの信頼性を取り戻すことは必要だと思う。そのときに、ローカルであることはとてもやりやすい。信州では少し広すぎるが、ある地域内では、資料とか、人とか、機関とかのポジションはわかりやすい。このことからも、信州知の連携、信州知の基盤を共有するのは、意味のあることだと思う。

著作権の話でも同様で、地域で出版されたものの著作者を追っていくことは、他地域や世界のものを追っていくよりも、はるかに楽である。市史など、行政が出している資料の中にも、著作権がわからなくなっているものがある。地域のローカルな機能である公共図書館の果たす役割がそこにもあるし、著作権の情報も含め、明確にしていく情報基盤があってもいいのではないかと私は思う。

（橋本館長）

リテラシーの問題が出たが、私が最初に子どもの絵を見せた意味には二つある。一つは、発想したり、イメージしたりすることは知的な行為であり、子どもにも知的な行為ができることをいいたかった。いわゆる子どもなりのリテラシーがある。

一方で、心配なことがある。デジタル化し、活用されるアーカイブは重要であり、進めなければいけないが、美術館にも来てほしい。実際の作品を見てほしい。作品を見ている瞬間が大事だということ。あまりにもデジタル化が進むと、行って、見なくても、理解した気になってしまう。デジタルの色彩が本物だと思い込んでしまう。

若冲の展覧会に私も 4 時間並んだが、並んでいる人の話を聞いてテレビの影響が大きいことがわかった。若冲の赤い紅葉の絵が、裏からも描かれていることを知っており、デジタル画像で理解している。これも大事なことだが、予備知識なしに直接に絵を見るときの感動を大事にしたい。アーカイブの裏で考えていかなければいけないことだと思う。

（笹本館長）

全く同じようなことが古文書の場合でもある。写真撮影の場と方法によって古文書は全く違うものになる。現物でしかわからない墨のかすれ、写りだとか、紙のそのものの質感がある。デジタルデータは入口としては提供したいが、実際に見て、触って、自分の力で判断していく力も教育していかなければならない。

一方、信州大学附属図書館には「濁流の子プロジェクト」というものがあり、三六災害の資料を全てアーカイブ化していこうとしている。これは天竜川上流工事事務所、かわらんべ、といった機関と個人の方の寄付によって実現したものである。

つまりこれからは、MLA 連携だけではなくて、連携は全ての場所でやっていかなければいけないし、目的によって方法もずいぶん違ってくるだろう。どんな新しい方策を行えば前進していけるのかについては、全ての場所で考えているだろうと思う。私たち歴史館でも、そのようなことを考えながら動いている。

（渡辺館長）

皆様から話をうかがったが、長野県とか信州といったローカルで連携し、資料・情報を集め、コンテンツをつくり、学びの場にしていくことが、価値の保証につながっていくような気がする。しかし、そうなると、これは本来、「日本」のことをやればいいのではないかという話にもなる。しかし、私は、長野のローカルのことをやれば十分に「日本」のことをやることになるのだと理解している。地域で連携しながら、情報の体系のようなものが学べる環境を提供することを、「日本」を学ぶことに置き換えることができ、価値になっていくのではないかと思うが、いかがだろうか。

（平賀館長）

「知る」ことと「わかる」ことの違いだとおもう。私は東京にずっと住んでいて、14 年くらい前に長野県に移住してきたが、そこで初めて、本当の農家の人とお話をし、玄関のドアを開ければ毎日山が見えるという暮らしをして、なるほどと思うことばかりだった。それまで頭の中で受験勉強や、学校や、新聞や、雑誌で学んできたことが、実感になった。だから私は、ローカルとは、触れる、見られる、食べられる、そういったことがともなった「知る」ことができる機会のある場所だと思う。

そこで、今まで自分が伊那でやってきたことは、デジタルな情報基盤があれば、図書館を一館まるごと持って、実際に食べて、おいしい、なぜだろう、すげえな、という話ができる―研究者にもフィールドワークというものがあるが、図書館を背負って外へ出ていけるようにすることだった。信州の図書館らしく、ローカルに着目して。

（笹本館長）

基本的に今いわれたことのとおりだと思う。私にとって最も大事なのは、自分の子どもであり、家内であり、という順序でいくと、自分から出発してまわりへと広げていく。いちばん近い過去と、いちばん近い未来が、私にとってはいちばん大事。足元でしっかり動いて、足元を知らなかったならば、次の時代を創ることはできない。私は地域へ行って、皆さんは本当に足元のことを知っているのですか、ということをよく言っている。信大生の場合もそうだが、東京のことを知っていれば知識だが、松本のことを知っていても知識でないような教育のやり方がずっとあったような気がする。本来私たちが何を大切にすべきかが忘れられている。本当はグローバルというのは、自分の足元にしっかり足を付けたうえで、世界を見まわす力を持つことではないか。

それが地域連携の基本であるが、ひとつの学問だけではどうにもならない。いろいろな人からいろいろなことを教えてもらわなければならない。「知る」ことと「学ぶ」ことは違うだろうと思っている。今の社会はどちらかというと、暗記力が優れているのが知だと思っているという気がしてならない。百科事典に全部書いてあることを述べるだけが知識ではないだろう。これがわからないということをはっきりいえる、ネットで検索したものでもこれがおかしいとか、このところには問題があるとかいったことをいえるのがほんとうは大学生ではないか。その意味では、渡辺館長たちがこれから図書館を通じて、信州大学に単にものわかりのいい学生ではなくて、ねばる学生をつくっていただきたいと思う。

（橋本館長）

信州大がたこ足大学で、遠隔会議を昔からやっているように、今ある状況をマイナスに考えるのではなくて、プラスに生かしていく必要がある。意外と足元を見ていないで、中央にあるものを持ってこようとする。私が 30 年前に東京からこの長野に来たときに感じたことである。自分たちのよさを見捨ててしまって、新しい先進的な情報、中央の情報を得ようとする。そうではなくて、自分たちの今持っているものを発信していこうという力が大事だと思う。

それから、子どものことについて話をすると、美術館ではベビーカーツアーをやっている。美術館は 3 歳の子どもでも鑑賞できる。アーカイブを考えていくと、知的な要素があるので大人の世界の話になってしまうが、中学校前の子どもでも美術館には来られるということを付け加えておきたい。子どものときから知的な活動はあるということを大事にしていきたい。

（渡辺館長)

話がだんだん大きくなってきた。いろいろな要望があることはよくわかる。会場の方からも何か質問などをいただきたい。

（会場）

私は大学図書館と歴史史料館の運営に関わっている者である。渡辺館長の話で、大学図書館では実は MLA もやっているという話があったが、私は図書館の仕事とともに大学の歴史資料を扱っているので、今日の話を聞いて、とても納得するところがあった。人や予算の問題があって、なかなか理想どおりにはできない。そこで、プラットフォームのような共通でできる部分は、お金や労力をかけずにつくって楽にしていき、コンテンツの読み解きとか、保存とか、利用面への支援など、人手をかけるべきところに力を入れていく。人材の有効活用をするために、手を結ぶ必要があるのだろうと今日のフォーラムを聞いて思った。本日教えていただいたことを持ち帰って、自分たちに何ができるのかを考えてみたいと思った。

（笹本館長）

次の「信州デジくら」をどうするかについては、皆で議論しているところである。その中で、私が述べたかったのは、互いの差を理解しておく必要があるということである。皆が同じではなくて、歴史館には歴史館の使命があって、そのうえで何ができるか。私が信州大学を離れてから思うのは、県の職員が県民思いであるということ。何かあったときに、県民のためだといえば、誰も文句はいわない。私が国立大学にいたときには、国民のためという感覚は薄かった気がする。そういう意味では、一緒に手を組んでいるし、本日も県の多くの方に来ていただいている。管轄は違うが、いつも話ができる体制はつくっており、長野県の未来に関しては、本日いわれたことについては実行していくと思う。

（平賀館長）

できることから、お金をかけないことから、というのはあるが、ずっと伊那市立図書館で取組みをしてきた中で、やはりそこには限界があった。これはよい取組みであると思ったことについては、お金をかけないでやってきたが、やはり、お金をかけないとできないところにぶつかると、八方ふさがりで出口がないと思った。

そこで、県とか大学と一緒に手をつなぐことで、図書館でいうと社会教育とか、情報教育とかに対するビジョンが、この信州全体に、何も一つでなくてもよいのだが、共有できればいいと思う。できることからがんばりたい。

（橋本館長）

国立、県立、市立と考えると、国とか国民は見えにくい。同じように、県の方が本日は大勢来られており、県民のために努力されていると思うが、やはり見えない部分が多い。美術館でいうと、21 世紀美術館は市立である。松本の博物館も市立である。地域が見えて、目的意識が深まると、具体的な方策が出てくる。そうすると、県というレベルはたいへんだと思う。やはり管轄の

違いがあり、スムーズに進まない。そんな現状を理解しているので、県の方には何とか縦割りの壁を超えて、横断的に進めていただければと思っている。

（渡辺館長）

今までお話いただいたように、おもしろい試みがたくさんある。問題なのは、継続性がなく、いつもやり直しみたいな感じで、積み重ねられていかない。非常にもったいないと思う。そのときに必要なのはやはり、皆で共有できるビジョンや目標があって、そこに乗っていけるようなかたちができないと、継続しないのだと思う。「信州デジくら」が 2010 年以降更新されていないという話でも、もう 1 回やろうとする労力はたいへんなことである。無駄にしないために、おもしろい可能性があるものをどう生かしていくのかを、一緒に考えたいというのが、MLA 連携の話でもある。

今回は第 1 回であるが、ぜひ第 2 回、第 3 回と、皆さんと一緒に考えながらやっていきたいと思う。

注

当フォーラムの資料は Web 上で公開されているので、以下を参照されたい.

【第 1 部】基調講演

・渡邊匡一（信州大学附属図書館長）　http://hdl.handle.net/10091/00019335

【第 2 部】トークセクション

・笹本正治（長野県立歴史館長）　http://hdl.handle.net/10091/00019336

・橋本光明（長野県信濃美術館・東山魁夷館長）http://hdl.handle.net/10091/00019337

・平賀研也（県立長野図書館長）　http://hdl.handle.net/10091/00019338